

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

# 大学間連携イベント 「国際協力ボランティアを知ろう」 実施報告書

平成25年10月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

## はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、紛争終結国等における平和構築と開発に関する調査、教育、実践を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業を平成 22 年度から平成 25 年度まで実施しております。本冊子は、この事業の一環として平成 25 年 8 月に実施した大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」の実施記録と、参加者による報告書を取りまとめたものです。参加学生は、独立行政法人国際協力機構（JICA）二本松青年海外協力隊訓練所において、これからアジア・アフリカの途上国へボランティアとして派遣される予定の訓練生の方々と交流し、2 年間の任期を終えて帰国された方々の経験を直接伺うことで「国際協力」をより身近に感じる貴重な機会を持ちました。また、東日本大震災後の原子力発電所事故によって、双葉郡浪江町から二本松市に避難・移転しながら伝統を受け継ぐ陶芸の存続のために尽力されている大堀相馬焼協同組合の訪問は、日本の内外を問わず「共に生きる社会」を実現するために私たちがなすべきことを考えさせられました。

本事業の実施にご協力、ご支援をいただいた講師の皆様、JICA 二本松の北野所長他スタッフと青年海外協力隊訓練生の皆様、大堀相馬焼協同組合半谷理事長に深くお礼申し上げます。

平成 25 年 10 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター



## 目次

1.	活動の概要	1
	(1) 目的	
	(2) 実施期間	
	(3) 実施場所	
	(4) 講師	
	(5) プログラム内容	
	(6) 参加者	
2.	参加者報告書	7
3.	学生発表資料	39
4.	事前学習報告書	45
5.	写真	51
6.	資料	55



# 1. 活動の概要



## 1. 活動の概要

### (1) 目的

途上国に住み、社会の中で現地の人々とともに働く国際協力ボランティアの役割や、ボランティアになるために必要とされる資質について理解を深める。

### (2) 実施期間

平成 25 年 8 月 2 日（金）～3 日（土） 1 泊 2 日

### (3) 実施場所

JICA 二本松青年海外協力隊訓練所  
大堀相馬焼協同組合

### (4) 講師

北野 一人氏 JICA 二本松訓練所 所長  
渡辺 久美子氏 (JOCV ニカラグア国派遣)  
景山 ともこ氏 (JOCV ケニア国派遣)  
半谷 秀辰氏 大堀相馬焼協同組合 理事長

### (5) プログラム内容

選考試験に合格してアジア、アフリカ諸国に派遣予定の青年海外協力隊およびシニアボランティア候補者 118 名が訓練中の独立行政法人国際協力機構 (JICA) 二本松訓練所を訪問した。訓練所長による JICA ボランティアの説明、ボランティア経験者 2 名による講義を受講し、ベトナム、カンボジア、エチオピアなどへ派遣予定の候補生 5 名との意見交換を行った。

ボランティア経験者の方々からは、志望の動機、現地での具体的な活動の内容や異文化での生活・仕事で直面した困難や喜び、ボランティアとしての海外滞在の経験が帰国後どのように役立っているかについて具体的なエピソードを交えながらお話いただいた。本学理学部卒業生 1 名を含む候補生との意見交換ではボランティアを志した様々な動機や国際協力についての考え方、社会人としてのキャリアと海外活動の関係などについて率直な意見を聞いた。

参加学生は講義やディスカッションから得た発見や感想をグループで取りまとめ、訓練所長他のスタッフの前でプレゼンテーションを行った。

帰路、福島原発事故に伴い浪江町から二本松市に避難している「大堀相馬焼協同組合」を訪問し、半谷（はんが）理事長から当時の事情や避難から組合再開までのお話を伺い、施設を見学した。

## 実施スケジュール

### 事前勉強会

① 6月22日(土) 13:30~15:00

「難民と人道支援～東日本大震災支援の現場で考えたこと～」

講師：中村安秀氏 大阪大学大学院教授

② 6月29日(土) 13:00~15:00

「国際協力ボランティアへの道」

講師：長瀬慎治氏 国連ボランティア計画 (UNV) 連絡調整官

池上恵美氏 JICA 青年海外協力隊事務局募集課主任調査役

注：事前勉強会は「国際共生社会論 (実習)」と合同で実施した。

### 当日スケジュール

時間	内 容
8:00-12:00	お茶の水女子大学正門発、貸し切りバスによる移動
12:00-13:20	昼 食 (JICA 食堂)
13:30-14:30	JICA 二本松の概要説明と施設見学：北野一人所長
14:30-15:00	休 憩
15:00-17:00	①青年海外協力隊経験者の講義 ● 渡辺久美子氏 平成 23 年度一次隊 派遣地：ニカラグア、職種：青少年活動 (現職：福島県いわき市高校教諭) ● 景山ともこ氏 平成 18 年第一次隊、24 年度第九次隊短期派遣 派遣地：ケニア、職種：村落開発普及員 (農林水産分野) (現職：J A職員) ②質疑応答
17:00-18:00	休 憩
18:00-19:30	夕 食 (J I C A 食堂)
19:00-20:00	派遣前の訓練生との意見交換
20:00-21:00	入 浴
21:00-22:00	グループワーク

時間	内 容
7:10-8:00	朝 食、チェックアウト
8:00-9:00	グループ別学習成果発表会
9:30-10:30	J I C A二本松発、バスによる移動
10:30-11:30	陶芸の杜・大堀相馬焼協同組合 口演、見学
11:45-12:45	昼 食 (道の駅 安達)
12:45-16:30	バスによる移動、お茶の水女子大学正門にて解散

#### 6. 参加者

お茶の水女子大学学生 8名 (うち留学生2名)

奈良女子大学学生 5名

引率 2名 (グローバル協力センター北林准教授、駒田 AA)

#### 内訳

学年	お茶の水女子大学				奈良女子大学		
	文教	理学	生活	院	文学	生活 環境	理学
1	3		1			2	1
2	1				1		
3	1					1	
4							
研究生	1						
M2				1			
合計	6	0	1	1	1	3	1



## 2. 参加者報告書



## 岡南 愛梨

### お茶の水女子大学生生活科学部人間生活学科1年

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

##### JICA と青年海外協力隊

JICA ボランティア事業としての目的は、大きく分けて三つあるそうだ。

- 開発途上国の経済や社会の発展と復興への支援

これは、日本の今までの経験やその中で培われた技術などを開発途上国に伝え、役立てることである。これを達成するために、国際協力ボランティアに参加する際には、確実な専門性が必要とされることが多い。

- 国際交流

日本という異国の地からやってくる人、として現地に入り、現地の人々とコミュニケーションをとる。その中から、日本という国に対する理解も深めてもらう。ボランティア側も現地を理解していき、相互的に具体的な接触をもって理解が進むことは、将来的に国や地域間での相互理解へとつながっていく。

- 日本への還元

現地で生活することによって身につけた知識や経験を、日本に帰ってきてから、国際人として社会へと還元する。ボランティアは行って帰ってきて終了なのではなく、その後の生活でも本人の一部となり続いていくものである。

JICA ボランティアには4種類あり、今回私たちが詳しく話を伺うこととなったのは、青年海外協力隊についてであった。これは、20歳～39歳の人に参加することができる。（それ以上の方はシニア海外ボランティアに参加できる。）年に2回募集があり、原則2年間現地で専門性を生かしたボランティアをすることになる。今は年間1200人～1300人を現地に送り込んでいるのだという。専門性というのは様々であって、作業療法士、幼児教育、日本語教育、理科教育、環境教育、コミュニティ開発、青少年活動などがある。なんらかの専門性の元で社会人経験を積んだあとに参加する人も多いようだが、大学を卒業してすぐに参加するような人もいる。参加が決定した人たちは、二本松または駒ヶ根にある訓練所で派遣前訓練を70日間泊まり込みで受ける。このJICA 二本松が、私たちが今回訪ねた訓練所だ。

##### JICA 二本松訓練所

ここには現在118名が訓練生として滞在している。訓練生は、現地の語学を主に学ぶ。みっちり一日に何時間も語学の時間があり、実際とてもハードであると訓練生も言っていた。語学の他にも活動手法や健康と安全の管理などを学ぶ。コミュニケーション技法なども含む。話を聞いた訓練生の方は、他人に発表・プレゼンをする機会がとても多いと言っていた。現地に入ると、自分が積極的に意見や考えを伝えていけないと何もすることができな

くなるからだという。訓練生は朝 6:30 にラジオ体操と国旗掲揚のため外に集まる。ラジオ体操後のランニングは体力作りの一貫でもあるという。訓練生はいくつかの班に分けられていて、様々な活動を共に行うことが多い。これは、ボランティア同士の連帯感や協力する態度や心構えなどを共に学んでいくためである。また様々な職種や年齢の訓練生たちが共同生活をしており、自主企画講座を開催したり参加したりすることで、積極的に訓練生同士でも学び合っているようであった。

一泊ではあったが私はここに滞在してみて、施設の広さと食堂のごはんの美味しさに驚いた。施設はいくつかの棟から成り立っており、その全てが地下通路で繋がっている。図書館も充実している。食堂のごはんは、おかずの種類も豊富で色鮮やかで量も多くとても美味しかった。毎週金曜日は世界各国の料理が出るそうで、今回私たちも食べる事ができた。

#### 青年海外協力隊経験者と訓練生のお話を聞いて

青年海外協力隊に行ったことがある方のお話を聞いてまず驚いたことは、他国の文化や社会の違い様である。ニカラグアの文化センターの活性化のために働きかけをした渡辺さんの話を聞いたとき、なぜ文化センターなどが重要になるのかと疑問に思った。支援が必要なところは他にもあるのではないかと思ったからだ。しかし話を聞いていると、その重要性がわかった。ニカラグアの学校は、基本的なことしか教えないため、美術や音楽の授業が無い。そのため市がお金を出して文化センターを作ったのだという。表現する楽しみや喜びを学ぶことは、子どもにとってとても大切なことである。その機会が学校で提供されない社会というものは、私にとって少し衝撃的だった。渡辺さんは学習の成果発表の場を用意するなどし、子どもたちの創作意欲をかきたてた。現地の大人のやる気も引き出し、皆で協力して文化センターへやってくる子どもの数も増やしたそうだ。こうした支援のあり方もあるのかと目から鱗だった。

渡辺さんは、最後に、寄付金から物を調達して現地の人に届けるという形の支援についてもコメントした。実際に現地でその様子を見た時、物をもらえる子どもももちろんいたが、物をもらえず仕切りの外で見ていた子どももたくさんいたのだという。お金をさっと出して、それが還元される様子をしばらくして知ることができる、という気楽に出来る目に見える形の支援は、支援する側としては確かにとてもやりやすい。しかし、本当に必要とされている支援はそのようなものなのだろうか。ケニアへ派遣された影山さんは、支援とは現地の人自立できるように助けることだと言っていた。物質的で一方的な支援に慣れてしまった地域では、支援に頼って生活してしまう。しかし、それでは永遠に進歩することが出来ない。青年海外協力隊や支援者が現地に滞在してられる期間は限られている。その期間に何をして、そしてその現地に何を残すことが出来るかが大切なことなのだ。

渡辺さん、影山さん、そして訓練生の方の話を聞いてとても印象に残ったのは、そのバックグラウンドの豊かさだ。渡辺さんは青年海外協力隊に参加するまで総合高校の先生

をしていたが、影山さんは特に社会経験もなく参加したそうだ。訓練生の方の中にも、NPOで長く活躍してきた方から、大学を卒業したての方までいた。様々な職種年齢の人たちが共同生活をして関わりあっている場所というのは、とても新鮮に感じられた。また、若くても、日本という国の社会の中で育ち義務教育を受けてきて、その中で得たものを伝えることができるという。青年海外協力隊に参加することは私には全く縁が無いことで、それは国際協力に興味を持った一部の専門家等が参加するものだと思っていた。今回の話を聞いて、自分に出来ることだってあるのかもしれない、自分にも何か力があるかもしれない、と思うことができた。

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと、今後の抱負

はじめは、内容もよくわからず、「なにかこれはとてもお得なイベントらしい」ということだけで興味を持った。国際共生社会論実習の先生が引率ということで気軽に申し込みができたということもある。私は高校のころから、様々なボランティアをしてきた。しかし、それは幼稚園や児童館、障がい児療育センターなどでのボランティアであって、いずれも「自分が何かを学び得ること」を目的としたボランティアであった。いわゆる「誰かのためになる」ボランティアをしたことが無かったのである。私の通っていた高校は帰国子女が多く、国際性も豊かであったため、国際協力という言葉を目にするには少なくはなかった。将来はそういった仕事に就きたいという話も何度か聞いたことがあった。しかし、私は、国際協力について何も知らなかった。海外に一人がぽんっと入って行ってもどうせ出来る事なんて限られているし、一部のコミュニティに少し人手が増えたところでなんの助けにもならないのでは、という勝手なイメージを持っていた。

このイベントを通して学び得たことはとても書ききれない。今回ここにあまり書くことができなかったが、最後に寄った陶芸の杜でも困難の中で人が前を向いて進んでいく力などを感じ取ることができた。国際協力ボランティアという得体の知れなかったものが、とても間近に感じられるようになり、参加できたことをとても嬉しく思う。

池森 菜実

奈良女子大学文学部人間科学科スポーツ科学コース専攻 2年

私は現在、国際協力と東北支援を主軸に活動しているサークルに所属していますが、東日本大震災が起これ、活動が東北支援にシフトしてしていました。国際協力に関する勉強会を開いているものの、具体的な活動には至っていないので、今回この「国際協力ボランティアを知ろう」で多くを学んで、これからのサークル、また私個人の活動にいかしていきたいという思いを持って研修に参加しました。

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

研修一日目は、JICA 二本松青年海外協力隊訓練所で OV による講義とディスカッション、訓練生とのディスカッションを行い、そして一日の終わりにはグループワークをしました。JICA 二本松での講義を通じて感じたことは、「どんな環境に置かれても前を向いていれば自分を磨ける」ということです。ニカラグアで青少年活動をしていた OV の方、ケニアで村落開発普及をしていた OV の方両者の話に共通していたのは、新しいコミュニティや価値観に出会い、逆境に立たされたとしても、根気強く前向きに努力することで何かが変わることでした。このことは、国際協力だけではなく、私たちが日々生活する社会の中でも当てはまることなのでとても印象に残りました。また、将来自分がどうなりたいたのか模索していた私にとって「引き出しを多く持つこと」、「言いたいことは言葉で伝えること」、「興味を持ったらとにかく挑戦すること」といった OV、所長さん、訓練生の言葉一つ一つが心に残っています。

#### 被災者の方の口演会を通じて感じたこと・印象に残ったこと

研修二日目は、おおぼり相馬焼の見学と講義がありました。被災者の方の口演会で印象に残ったことは、今も原発事故の影響が消えていないこと、それでも被災者の方は前を向いてるということです。もともと高齢の窯元が多く、原発事故によって地元を離れなければならなくなり、それを機に引退する人も少なくないそうで、約 300 年の伝統があるおおぼり相馬焼の窯元も以前と比べ減少傾向にあることは非常に悔しく思いました。しかし、口演して下さった理事長さんは、おおぼり相馬焼を存続させたいと非常に前向きに語られ、常に笑顔で私たちに接して下さいました。どんな状況にいてもポジティブに物事を考え、行動する姿勢にとっても心動かされました。

#### 国際協力や被災者支援ボランティアについて考えたこと

今まで、国際協力と被災地支援はどこか別のものと思っていたし、外国への支援よりまずは日本国内の支援を優先した方が良いのではと漠然と考えていましたが、今回の研修を通してそれらの考えは打ち消されました。東日本大震災では、国内外から多くの支援金や

物資が寄せられましたが、その中には日本が支援していた発展途上国や貧しい国からのものもありました。日本のこれまでの支援が物資だけではなく心を通じたものだったからこそ助け合い精神が生まれ、起こったことだと思います。また、先進国であり、支援する側だった日本が、震災後支援される側となり、衣食住環境はもちろん多くの面で防災対策の不十分があったこと、国際協力の中で得た知識や技術がいかせるということが分かり、国際協力と被災地支援は別のもなどではなく、お互い学び合える関係だと知りました。また候補生の方とのディスカッションを通じて、海外、日本という二者択一ではなく、自分の役割としてどこにシフトすべきなのか考えるということが重要だと知りました。

JICA 二本松の研修では、新しい価値観や考え、人に出会うことができ、今後の私の活動にも多くをいかせると思います。

#### 今後の学習や研究に向けた抱負

この二日間の研修を通して学んだことは多くありますが、今後の活動や私自身の人生において「どこにいても、どのような状況下でも前向きな気持ちであり続けること、そして努力し行動を起こすこと」を大切にしていきたいと特に思いました。二日間の研修で得たものをより多くの場所で還元し、より良いものにしていきたいです。

内山みどり

お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科 1年

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

青年海外協力隊の活動は、自分が専門としている分野に特化して行われるが、もし私が参加する場合、果たして自分が発揮できる専門分野はあるのだろうか。JICA 二本松を訪れ、資料を読みながら、そんなことを思っていた。しかし、講義やディスカッションのなかで、自分にも提供できる価値があるのではないか、と思った。外部から現地のコミュニティに入ることのメリットとしては、まずは現状を客観的に見て、問題点などを指摘できるということだ。例えば、日本で教師をなさっている方のニカラグアでの活動。ニカラグアの小学校は午前午後の二部制であるため、一日当たりのコマ数は少なく、学べる教科は国語、算数、宗教と限られてしまう。一方で、日本の小学校では音楽や造形などの科目も設けられていることから、協力隊の方は市文化センターがそのような情操教育を補う必要性を感じ、文化センターに様々なプログラムを設けたという。このようにニカラグアの市文化センターに工芸コンクールや絵画教室、映画上映の企画を持ち込み、実行できたのも日本の初等教育とニカラグアの教育現場を比較できたからである。また、協力隊は自分の専門分野や技術をそのまま提供したり、押し付けたりというよりもコミュニケーションの架け橋であるという意識を持つことが重要である。村落開発普及を担当した方によれば、本当は現地の省庁の職員が持つ技術力は高いにもかかわらず、村のコミュニティとの連携を図れないために浄水システムが滞ってしまう事例があるという。そこで、村落開発普及員として両者の間に立ち、調整役として働くことになる。また、村落開発とはいえ、浄水に関していえば新たな装置を導入するよりも既存のものを修繕し、修理のための材料を村民自らが調達できるよう、浄水管理への村民の参加体制を整えることも大切だ。もちろん、修理のための費用を村内で調達できるよう、養鶏などの収入向上プロジェクトを行うといったことも、村のコミュニティが持続可能となるための手段である。すなわち、村落開発員には村民の暮らしに寄り添いつつも、外部からの参加者として、現地に潜在する問題を発見し、解決するための新しい切り口を提供することが求められるのだ。

#### 被災者の方の口演会を通じて感じたこと・印象に残ったこと

被災した方のお話を直接伺うことで、新聞やテレビが伝えきれない現実も浮かび上がってきた。皮肉なことに原発から遠く離れるほど震災直後の原発の危機的状況が伝わり、避難のための交通手段まで用意されていたのにも関わらず、半谷さんを含め原発の近くに住む人々には何も知らされていなかったこと。そして原発が危険な状況にあるということに離れて住む親戚から聞いて初めて知ったということ。夕暮れ時になると、高齢のご両親が「浪江に帰りたい」とこぼし、それを聞く度に半谷さんは心が痛むということ。東北の大学に調査を依頼したところ、土壌からは1時間あたり80マイクロシーベルトという異常な

数値が検出され、基準値を大きく上回っていたことが判明。東電や国による数値の隠ぺいに、馬鹿にされたという怒りが抑えきれないこと。さらには、新聞社が事実をありのままに書くと約束し、半谷さんが取材に応じても実際公になる記事には真実がカットされているということ…。「しっぺ返しを受けたのは東電ではなく私たち」と悔しそうに語る半谷さんは、この事故が「人災」であったということを強く訴えかけていた。いままで福島原発が作り出した電力の恩恵を福島の方ではなく東京に住む私たちが受けていたことを改めて思い知ったような気がした。「奴隷のように足に鎖をつけられたような気持ち」という言葉からは先行きの見えないもどかしさと不安がにじみ出ている。

半谷さんをはじめとし、原発のそばで日常生活が営まれていた方々にとって、震災後の月日は「復興」という明るい兆しにまっすぐ進んでいったわけではない。むしろ、再び帰れる見通しの立たない故郷を離れ、いままで積み上げてきたものに別れを告げなくてはならない、という現実だ。しかし、その一方でおおぼり相馬焼の再興を心待ちにして店のプレオープンの日には、陶芸の杜に車が長い列をなすほど多くの客が訪れたという。私たちは、外から震災からの復興を見守るのではなく、このように実際に足を運んで商品をもとめるという形であっても復興にむかう小さな柱になれるのではないかと思った。

#### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

ボランティアは誰かに強制されて行うものではない。もちろん自分を必要としている人のために自発的にするものである。しかし、今回 JICA 二本松で訓練を受けている方々のお話を伺うと、自分のためでもあるという方も多かった。そして、教育に関心があれば教師として現地で理科を教えたり、日本でビジネスに携わっていたことを生かしてアフリカでのビジネスを模索したり…と 10 人いれば自分の提供価値も 10 通りであるように、おのずと役割分担もできるのだ。そのため、結局は「自分は何をやりたいのか→何を残せるのか」という意志・目的意識に従ってボランティアをすることが望ましいのではないか。また、国内での震災後など「いまは海外を支援する場合ではない、」と二元論で必要・不必要などと決めつけず、いかにバランスを取っていくか、といった柔軟性を持つことで、支援に関して相手国と持ちつ持たれつ関係を維持していけるのではないか。

#### 今後の学習や研究に向けた抱負

今回のプログラムの後、私はそもそも「ボランティアとは何か」という問いを自分に投げかけていた。私には、ボランティアと聞けばボランティアする側とされる側という二つの立場のもと、一方通行な関係が成り立っているイメージがあった。しかし、青年海外協力隊の方々との交流を通じて実際はそのようなイメージとは異なるのだと気づいた。

ボランティアの協力隊という以前に、他国からやって来て現地の活動に参加する立場として求められるのは、地域の人々と密接に関わり、現地の人々の立場から考えられるようになるということだ。そのためには、お茶飲み話といった仕事以外の場においても現地の人

と時間を共有することも大切だ。政府や国際機関主導の開発の場合、トップダウン方式になりがちだが、協力隊のように一個人として活動することで、より地域に密着した活動を行えるのだろう。

いま私に必要なものは、潜在する問題を発見し、指摘したうえで、実現可能な解決策を提案する力だろう。日常生活のなかでも実践できるが、場を途上国や被災地に移すと解決方法を編み出す段階で現地の人との摩擦もおこりうる。そこで、摩擦が起きたとき、どのように対処すべきか、コミュニケーションをとる力も養いたい。

神谷 菜穂花

お茶の水女子大学文教育学部人文科学科グローバル文化学環 2年

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

訓練所の所長さんや候補生の方とお話を通して思ったことは、主に2つあります。

1つ目は、当たり前のことですが、青年海外協力隊として発展途上国へ行きたいと思った理由は個人によってそれぞれ違って、正しい理由だとかこの理由だから動機が強いといったことはない、ということです。候補生の方も、実際隊員として派遣されていらっしゃった方も、さまざまな背景を持ち、それぞれ異なった思いで協力隊に応募していらっしゃいました。2つ目は、わたしは協力隊という仕事を甘くみていた、ということです。訓練所での生活は、思っていたよりも遥かに厳しいものでした。朝6時半からのラジオ体操とランニング、1日5時間の語学学習、大量の課題、山に閉じ込められた生活、厳しいドレスコードは、どれも想像もしていなかったものでした。そしてその生活が終わったら、派遣先では日本とは全く違う生活が2年間続くのだと思うと、とても生半可な気持ちでは向き合えない仕事だと思いました。派遣されるボランティアには、派遣された先で何が求められているのか、何が必要なのか考えてそれを実行していく能力、実行できるだけの現地の方との信頼関係、日本とは比べ物にならないほど不便な場所で生き抜いていくための体力や精神力、そういったものが必要とされていて、それを身につける場所がこの訓練所なのだと感じました。協力隊の予算はODA、わたしたちの税金からでているのだと思うと、協力隊員が派遣されるということはわたしたちも間接的に国際協力をしているのだと思います。



↑ ↓ J I C A 青年海外協力隊訓練所



## 被災者の方の口演会を通じて感じたこと・印象に残ったこと

陶芸所を訪れて、恥ずかしながら、自分が大震災のことを既に自分の中で過去のものとしていたことに気づきました。「ずっと暮らしてきた故郷に、家に、もう戻ることができない。そのことを、両親にどう説明したらいいのかわからない。」という言葉が、被災者の方のお話で最も心に残っています。大震災の直後、大震災のことを扱った新聞記事に、「1年、2年と時間が経てば、当事者以外は震災のことを忘れてしまうだろう」という被災者の方のお話が載っていましたが、



↑放射能の影響で移転した陶芸所

「わたしは忘れない、風化させたりなんかしない」と思っていました。わたしは確かに大震災があったという事実は覚えていたけれど、勝手にもう終わったものとして自分の中でまさに風化させていたことに気がつきました。

## 国際協力や被災地信ボランティアについて考えたこと

日本は先進国の一員なので、援助する側の立場ですが、ただ一方的に援助するだけではなく現地のコミュニティの一員となって、現地で必要とされているものを創り出す手助けをすることが大切だと思いました。「先進国の技術を教えてあげる」のではなく、現地の方と一緒に生活することで、お互いにそれまでの価値観を転換させていくことができるのではないかと、思います。

重松 貴子

お茶の水女子大学文教育学部人間社会科学科社会学専攻 3年

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残っていること

今回の JICA 二本松での講義は、青年海外協力隊の活動について知るだけでなく、青年海外協力隊として活動される方、これから活動なさった方の人柄に迫ることができる素晴らしい機会だった。私は就職活動を目の前にした学部 3 年ということもあり、間近に迫った将来について思い悩んでいる最中に、今回のセミナーに出会った。そのため、多様なバックグラウンドの持つ講師の方々やさらに食堂で何げなく話した方々の、これまでの人生、そしてどうして青年海外協力隊に参加したかといったお話は、自分のこれからの人生を考えていく上で、とても貴重だったように感じる。

最も印象に残っているのは、これから青年海外協力隊として活動される方のお話にあった、「若い人は二者択一で物事を考えようとしてしまうが、二元論で考えるほど、物事は単純ではない。」という言葉だ。その言葉を聞いて、私は自分自身の考えの幅の狭さを気付かされた。自分自身は将来どういう道に進みたいのか、そして自分には何が出来るのか。将来を考える中で私は、一つの選択肢を取るには、ある道を諦めなければならない、しかし、一つの選択肢は自分に本当にあっているのだろうか、と悶々と考え続けてきたように思う。しかしながら、動き出す前から迷っていても、それは机上の空論に過ぎず、何も得ることは出来ない。いくつかの道から一つの道を選択したとしても、その次の道として選ばなかった道に繋がる出会いがあるかもしれない。考えるだけでなく、進む気持ちが大切だと感じた。

青年海外協力隊に派遣される方々のお話をお聞きして、様々な職業を経て、青年海外協力隊に進むという選択をした方が多かったように感じた。今回のセミナーを通して、青年海外協力隊の魅力について知り、自分自身もこの活動に参加できたらどんなに素晴らしいだろうと感じたが、今はまず手の届く範囲で自分自身をもっと高め、将来青年海外協力隊という道を選ぶのであれば、青年海外協力隊への努力はその時の自分に託していきたいと願っている。

#### 被災者の方の口演会を通じて感じたこと・印象にのこっていること

東日本大震災によって、相馬の地を離れることを余儀なくされながらも、二本松という新たな地で新たな一歩を踏み出そうとしている姿はつらい状況においてもめげない力強さを感じた。しかしながら、相馬の地を離れなければならなくなったことへの大きな悲しみも言葉の端々からにじみ出していた。

「おじいちゃんやおばあちゃんが夕方になると浪江町に帰りたいと泣くんだ。でもどうすることも出来ない。」

眉を潜めておっしゃったその言葉には、長く暮らした故郷に 帰りたいが帰ることが

できない心の葛藤や無念さが残る。東日本大震災から二年以上経ち、原子力発電の問題は連日報道されるが、被災地以外の土地に住む一般の人々の中での関心は震災直後に比べて東日本大震災への関心は薄れてきたように感じる。私自身も、遠い土地に暮らす自分自身が被災地の方のために何ができるかということをも自分なりに真剣に考えていた震災直後と比べると、現在の関心は薄れていたように恥ずかしながら感じる。

しかし、震災において何も失っていない私たちに比べ、家族そして故郷というように、被災者の方々が失ったものはあまりにも大きい。私自身の想像を超えるほどだと思う。被災者の方が強い気持ちで前に進もうとなさる一方で、失った悲しみが時間を止め、どうにもならない現実が歩みの邪魔をしているのではないだろうか。

被災者の方の口演をお聞きし、被災者の方の今について改めて考えた中で、たとえ被災地とは離れていたとしても東日本大震災についての記憶の風化はあってはならないと強く感じた。自分自身は東日本大震災のことを記憶にとどめ続け、考え続け、時には現地に出向いて行くことは勿論、将来の道として、被災地の現状を伝え続けること、そして記憶を繋ぎ続けることをライフワークとすることは出来ないかという希望が生まれた。

#### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

今回のセミナーに参加する上で、私が最も不安に思っていた点は、「外の人間が現地に飛び込んで行う活動は現地の人々が自分たちで活動を行う草の根レベルの活動に比べ限界があるのではないか。」という点だ。現地のコミュニティに飛び込んで、奮闘したとしても文化や生活の違いから現地のニーズを把握するのは難しいと感じていた。今回の講義を通して、現地で活動する方々のお話を伺ったことで、この疑問について自分なりの答えを見つけることが出来たように思う。

講義の中で最も印象に残ったのは、ニカラグアに派遣された渡辺久美子さんが紹介なさっていた現地のカウンターパートについてだ。ニカラグアの文化センターに派遣された渡辺さんは、カウンターパートの方の存在によって、文化センターにおいて一方的な講習会ではなくより現地の人々に沿った企画を建てることが出来たと語っていた。その様子をお聞きして私が感じたのは、現地の人々に寄り添って、現地の人々を巻き込みながら支援を行っていくという、人の縁や繋がりを大切にされた支援の姿であった。いくらニーズを把握しようと思っても、限界がある。どれだけ現地の人々を知る努力をしたとしても、外の間はその現地の人になることなど不可能だ。ならばその限界を認めて、現地の人と協力し合いながら支援を行っていくことが重要なのではないかと感じた。

高見 明日香

奈良女子大学生生活環境学部生活健康・衣環境学科衣環境専攻 3年

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

前置きとして、私の興味のあることとの中心には東日本大震災がある。今回 JICA 二本松でのお話を聞くにあたって、国際協力を行う人は東日本大震災についてどんな思いがあるのか聞いてみたかった。海外の状況を実際にその目で見てきた人たちにとって東北の様子とはいったいどう映るのか知りたかった。

渡辺さんは、2011年の震災直後にニカラグアへと渡り、ちょうど今年2年間の体験を終えて帰国した。2年の月日が過ぎて、帰国し、福島の実状を再確認したとき、何も変化がないように思えたという。海外では、日本は技術的に優れており、復興の速度も速いと考えられているようだ。しかし、そんな日本であってもまだ震災直後と同じように苦しんでいる人がたくさんいることにショックを感じたとい話であった。もちろん原発の問題はかなり難しい話だと思う。簡単には解決するようなことでないのは確かだろう。渡部さんは震災直後の派遣で相当迷ったが、ニカラグアへ行くことを決めたという。ニカラグアに行く固い決意をもってしても、この震災は大変大きな意味を持つものだったのだろう。国民一人一人が考えなくてはいけないことなのだと改めて感じた。もしかしたら、ニカラグアに行くことで、一層日本の技術力に優れたものを感じたが、そんな日本が「まだここまでしか進んでいないのか」という気持ちになったのかもしれない。一方で、景山さんのお話では、国からの支援をすぐの受けることができる日本は、やはり体制がよく整っていると感じていたようだった。海外での生活では、毎日水が供給されるわけではなく、日本での震災時に近いような環境だったという。そんな状況でも、日本は次の日にはなにか対策をとって、必要最低限の水が供給されるようになっていることは誇れるべきところだと感じる。日本での震災は国際的な立場から考えたときに、重要な意味をもっているのだろうと感じた。今後、この東日本大震災での体験は海外でも活用できると思う。日本人が海外支援をすることで、日本がなにか危機的な状況に陥ったとき、協力してくれるといことが JICA 二本松に行き、理解できた。グローバルな人と人とのつながりを実感できよかったと思う。

#### 被災者の方の口演会を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今まで直接被災者に東日本大震災について聞いたことのなかった私にはとても考えさせられるお話であった。福島はやはり、原発についての問題のために苦しんでいる人が多いということがよく分かり、原発というのがポイントになっていることを改めて感じた。また、今回訪れた、陶芸の杜のように、伝統的な工芸品も放射線の影響を受け、危機的状況にあるということを知ることができた。震災が起きたときには、50~60%のものが壊れ、売り物にならなかったという。また、これを機に仕事を引退してしまう人も何人かいたそうだ。高齢者の多い産業で、後継者不足の問題にも直面していることもあり、もっと若い世

代がこのような状況について考えていかなくてはと思った。お話の中では、今も足かせをされているようでとても辛いといことを聞いた。原発は天災なんかではなく、人災であり、被害者は東電ではなく、そこに住んでいた住民だということをもっと発信しなくてはならないと思った。私たちのような若い世代が真実を知り、行動すること・発信することでも被災者にできることがあるのではと強く感じた。語るのも決して楽しいことではないはずだと思うが、今回このようにお話を聞くことで、自分の中で原発と被災者に対する思いもより深まった。なにか大きなことでなくても復興に携わることができたらと感じた。被災者のメンタルを考えるとやはりやりきれないところが多いのだろうと思う。震災時に、友人の安否を心配し連絡をとったとき、自分の友達があまりにこの震災の重みを感じていなかったことが凄く悲しかったことを思い出した。復興のカギとなる次の世代がこのような状況ではと思う。自分にできることを再確認する時間だったと感じた。

竹山 舞香

奈良女子大学生生活環境学部生活文化学科 1年

JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと



私は国際協力について以前から興味があったものの、自ら講義などで国際協力について勉強したことはなかった。しかし、友人に誘われて、知識があまりない私が行くことに不安を感じたけれど、国際協力について学んでみたいと感じ、この「国際協力ボランティアを知ろう」というイベントに参加した。

実際に JICA 二本松に行ってみると、施設はとても広くきれいで、教室も充実していて驚いた。また、講義を通して、国際協力とはどういうものなのか、何が大切なのかを知ることができた。

青年海外協力隊 OV の方々の話を聞いて、現地の人々のつながりが非常に大切なのだということを知った。地域のことを何も理解せずに、集めた募金で物資をリストに挙げられた人々にだけに届けるだけのボランティア団体があるということも知り、ただ単にものを与えるだけのボランティアではその国のためにならないと感じた。そして、青年海外協力隊のように実際にその地域に行くことで、何が足りないのかということを知り、物資もそうであるが、教育の方法やビジネスのやり方を教えることで、青年海外協力隊が帰国した後もその発展途上国が自立していけるようにすることが、本当の国際協力なのではないかと思った。また、地域の人と同じように暮らすために、やはり言語が重要であるが、たわいのない会話をしたり、あいさつをしたりすることの大切さも知った。さらに、自分の身を自分で守るためにも体力をつけて強くなってはならない、ということを知り、当たり前のことではあるがとても重要なことであると思い、毎朝、候補生はラジオ体操とマラソンをしているということには驚いた。

また、講義を通して国際協力によって発展途上国を自立させるということも重要なはたらきであるが、考え方を転換させるということも重要であると思った。ニカラグアに派遣された渡部さんの話から、まだまだ発展途上国では日本よりも男女差が厳しいところが多く、男性は何もしないでいるけれど、女性が実際に働く姿や、男性も同じように雑用もするのだと教えてあげることによって、男性が偉いのだという認識を排除させるはたらきがあると感じ、それはこれから発展していく国にとって、女性のためにも非常に大切なことであると思った。

### 被災者の方の口演会を通じて感じたこと・印象に残ったこと

二日目に訪問したおおぼり相馬焼を作られている陶芸の杜での口演会では、半谷理事長のおおぼり相馬焼を守っていこうとする意志はすごいと感じ、今まで住んでいた地元を離れて辛い中、復興のために努力しているお話には感動した。また、被災した方々はなんとか生活できるように頑張っているのに、政府は重要な情報を黙っていたり、政府がよく見えるようにメディアで情報を流していたりするというのを聞き、やはりそのようなことは起きているのだと失望し、政府もメディアの情報も信用できないと感じ、とても悲しくなった。復興には地域の人々の努力だけではなかなか進まないと思う。だからこそ国の力が必要であるのに、政府が上辺だけの協力しかしていないから、まだ福島は復興が進んでいないのだと感じ、原発も政府によって開発しなおしていかないといけないと思った。そして、最後に売店でおおぼり相馬焼を実際に手で持って見て、いろんな種類のものがあり、素晴らしいものばかりで、これからもこのおおぼり相馬焼を守ってほしいと思った。



### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

今回のイベントを通してボランティアとはなんなのか、大切なことは何かを学ぶことができた。そして、自分ができることを精一杯していけば、人のためにもなるし、人のために何かすれば、自分にもためになることは必ずあるということを知った。発展途上国に行くことで、大変なこともあるけれど精神面で成長できると思うし、今回の被災のように日本が困ったときに協力してくれるという点でお互いに利点ばかりで、国際協力はやはり素晴らしいものであると感じた。また、講義などを聞いて、国際協力や被災地支援において私も実際に現地に行って協力していきたいと思ったが、今の私には人のためになる能力は何もないと思う。だから、私が今できることを一生懸命やることの方がむしろ重要なのではないかと考え、そのひとつに今回学んだことを人に伝えていくことや、さらに国際協力やボランティアを学んでいくことではないかと思った。それは、外側からの協力ではあると思うけれど、ボランティアのことや困っている地域の情報を伝えていくことも一つの協力になると感じた。また、JICA 二本松にいたときに、みんなが協力し合っていたり、私が荷物を重そうにしていたら、声を



かけてくれたりして、簡単なことだけどなかなかできないことで、私はいつも気が利かなくて何もできないし、駅などで困っている人を見てもなかなか声をかけられず後悔することが多いので、自分も周りを見て何をすればいいのかということを考え、勇気を出して困っている人の手助けができるようになりたいと思う。

JICA 二本松にいる方々も被災された方も本当に努力されていて、その姿を見て今の自分はまだまだ頑張れていないと感じ、もっともっと勉強も、将来のためにも一生懸命頑張っていきたいと思え、精神面でももっと強くなっていきたい。

## 陳 偉琦

### お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻 M1

FACEBOOK で友達になってくれた訓練生の YY さんから「今回 NTC に見学に来られたということは、やはり国際協力分野に興味をお持ちなのですか？」という質問がありました。

確かに、今回のお茶大グローバル協力センター主催の「国際協力ボランティアを知ろう」に参加した人はきっと国際協力に興味を持っているから応募したと考えられます。しかし、私の参加動機は少々違います。日本に留学しに来る前に、ずっと中国で平凡な学校生活をおくっていました。いままで国際協力活動にふれる機会がなくて、興味というか、今回はせっかくの機会をつかんで未知の世界を見に行ってきました。

アジア・アフリカ・中近東諸国に派遣される青年海外協力隊候補者は、派遣される前に JICA 二本松青年海外協力隊訓練所で、65 日間にわたり、規則正しい集団生活をしながら訓練を受けます。二本松に到着した初日、一番印象に残ったのは、訓練所にいる人はみんな積極的に挨拶してくれたことです。「こんにちは!」「おつかれさま!」と明るく声かけられると、思わず親近感が湧いてきました。実際、食堂で訓練生たちと食事しながらいろいろ話してみると、やはり話しやすく情熱的で個性的な方が多いなと思いました。派遣先で当地の人々と信頼関係を作ることは協力活動を行う前提で、それを実現するためには人とうまく仲良くなる外向的な性格とコミュニケーション能力が必要されていると感じました。

また、初日に二人の女性経験者の講義を聞かせて頂きました。男尊女卑観念の強い国も少なくないため、国際協力活動においては男性ボランティアのほうが多く需要されているのではないかと先入観を持っていましたが、JICA のボランティア人数は男女半々だと聞きまして意外でした。経験者の方の話によると、実際のところ、女性支援活動などの女性しかできないことがたくさんあります。そのほか、女性は粘り強さ、共感する力で、たいていのものを乗り越えていけるという強さを持っています。よって、女性ボランティアも大活躍だそうです。

JICA 二本松青年海外協力隊訓練所は訓練の施設だけではなく、「地域に開かれた訓練所」を目指して、訓練プログラムに公開講座・行事や所外活動等、市民の皆さんと交流の機会となるプログラムも取り入れています。その実績の一つは、2011 年東日本大震災の直後に、訓練所は避難所として使われていたことです。二日目、私たちは被災者である大堀相馬焼協同組合半谷理事長の話をいただきました。半谷理事長は何回も何回も「悔しい、悔しい」と悲痛な声を上げたことは未だに忘れられません。震災から二年経っても、たぶん何年経ってもふるさとに戻れない被災者の生活は本当に辛く苦しいと感じました。

今回の参加を通じて国際協力についての考えを深めることができました。特に気に入ったのは「協力」という言葉です。「支援」ではなく、「協力」という言葉はより平等な関係を示しています。例えば、経済的な支援は確かにに行いやすく必要なのですが、支援さ

れる側の本当のニーズを知らないと一時的で一方的で乱暴な支援の仕方となるだけです。

「実は現地の人からいろいろ学びました」と話してくれた経験者は多数いました。

協力、つまり助け合うという相互的な関係です。それでは、発展途上国は国際協力においてどんな役割を果たせるのでしょうか。中国出身の私は自国のことを考えました。いままでは中国のこと、発展途上国だと認識していましたが、最近はしばしば日本人の友達に「中国の GDP は世界二位だよ、発展途上国じゃないでしょう」と言われます。調べた結果、開発途上国の明確的な定義がなく、一般的には経済発展、開発の水準が先進国に比べて低く、経済成長の途上にある国を指します。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの国々に多く、一般的には経済協力開発機構(OECD)の開発援助委員会(DAC)が作成する「援助受取国・地域リスト」(DAC リスト)第 I 部に記載されている国及び地域を指しています。近年はこれらの国でも経済成長がみられる国も多く新興国という言葉も使われるようになっていきます。時間が経てば、今はまだ受け身の途上国はいつか新興国と評価されます。そして、その時こそ国際社会の一員としての責任を果たす時だと思えます。下の図のように、協力の動作は必ずしも同時に発生するものではなく、動作の前後があっても最終的にはサークルとなるものだと考えます。

現在の中国政府は確かに資金を出して海外支援プロジェクトを盛んに立ち上げていますが、JICA のような一般人でも国際ボランティアとして参加できる機構は存在しないようです。これから、中国のような新興国でも同じ環境が整うのを期待しています。



山下 悠

お茶の水女子大学文教育学部人文科学科 1年

#### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

JICA 二本松での講義・ディスカッションの中で特に印象に残ったことは、「引き出しは多ければ多いほどアドバンテージとなる」ということと、「日本の復興の経験を世界で活かす、また、逆に世界の難民支援の現場や被災の経験を日本で活かす」ということです。「引き出しは多ければ多いほどアドバンテージとなる」、というお言葉は、今の私にとって勇気づけられるものでした。大学に入学し、今まであまり興味のなかった国際協力に興味を持ちました。そのきっかけとなったのが授業の中で、NGO で実際に働いていらっしゃる方のお話を聞いたことでした。それから様々なイベントに参加したり、学生団体に入り、勉強をしてきました。それらの活動を通じて、今までの考えを覆されるような経験を何度もしました。そのたびに、このような考え方があるのだ、と新たに気づくことが多くありました。一つの物事について様々な視点から考えることができれば、解決への糸口が見つかると思います。これからも、経験する全てのことには意味があるのだ、必ず自分の力となるのだ、と想着様々なことにチャレンジしていきたいと思います。また、知識をつけることと、実践を積むことのどちらも欠けてはいけません。正しい知識を身につけ、実践し、新たな気づきを得ていく、そのような経験を積んでいくことが大切なのではないかと思いました。次に、「日本の復興の経験を世界で活かす、また、逆に世界の難民支援の現場や被災の経験を活かす」という言葉は、日本と任地国との双方向的な関係を築くことが大切ということと結びついていると思いました。この言葉を聞いて、私は「困ったときはお互いさま」という言葉を思い出しました。自分たちの復興の経験、またそこから得た防災・減災の知識は、自国の子どもたちに伝えていくだけでなく、他国にも広めていくべきだと思いました。もちろん地域によって気候やそれまで歩んできた歴史は違うので、必ずしもすべてが活かせるわけではありませんが、自分たちにも応用できる、という点については、積極的に活用していくべきだと思いました。

#### 被災者の方の口演会を通じて感じたこと・印象に残ったこと

被災体験のお話を聞いて、テレビや新聞などからは伝わりきれない人々の思いを知ることができました。私は以前、宮城県にボランティアに行ったことがあり、そちらでも被災された方のお話を聞くことができたのですが、原発についての「生の声」を聞いたのは、今回が初めてでした。情報が正しく知らされないことへの不安と怒り、また、震災当日からどのように過ごされてきたのかということをお話していただき、大変心に残りました。半谷さんのお話から、私は、状況に合わせてその時に最善と思われる行動をしていくことが大切なのではないかと考えました。情報が錯綜し、何が正しいのかわからないなかで、自分の身を守りながら判断し、行動していくことは簡単なことではないと思います。

しかし、半谷さんが二本松で窯元をなるべく多く復活させると決断したときのお話を聞き、新しい機会や提案を少しずつでも受け入れていくことの重要性を教えていただいた気がします。

#### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと

今回のセミナーを通じて、国際協力ボランティアには、様々なアプローチの仕方、かかり方があるということを知りました。青年海外協力隊ひとつをとっても、農林水産、土木建築、保健衛生、教育文化、社会福祉、と様々です。私は大学に入学する以前は、国際協力に携わるのであればそれを職業としなければならないと思い込んでいました。しかし、大学での授業や、今回のセミナーを通して国際協力への関わり方は一つではないのだということを知りました。まずは国際協力に理解を持つこと。そして色々な分野を知り、自分の興味のあるものを実践などを通して深めていき、それに自分のできる範囲で関わり続けることが大切だと思いました。フェアトレード商品を買うなど、自分の日常生活に少しずつ国際協力を取り入れることも、私たちにできることの一つであると思います。

#### 今後の学習や研究に向けた抱負

私は、大学に入学し勉強をしていく中で、将来の夢がぼんやりとはありますがみえてきたように思います。大学を卒業したら、まずは公務員として市民に寄り添った仕事をしながら、社会や組織についての知識をつけていきたいと思っています。そして、数年仕事をしたところで、できれば NGO に転職したいと考えています。なぜ新卒で NGO を目指さないのかというと、以前震災ボランティアでお世話になった NGO スタッフの方に、NGO は即戦力が求められており、経営や組織について事細かに説明はしてくれない、そのようなことは知っていて当然のことだというお話を聞いたからです。そして、本当に助けを必要としている人々の力になりたいと考えています。具体的には、発展途上国のなかでもとりわけ地位が低いとされている障害者の方の力になりたいと思っています。これから先、この夢を叶えるために勉強をしていく中で、私は常に、考えているだけでなく行動に移すことを大切にしていきたいと思っています。知識と経験が合わさって本当に理解できるようになるものだと思います。学んだ知識が常にうまくいくとは限らないということも、実践してみなければわからないことだと思います。そして、そのために今できることは何でも挑戦してみようという気持ちでいます。具体的には、日本だけでなく海外の盲ろう学校などのボランティアができる NGO 主催のスタディツアーなどに参加することを考えています。また、「この夢を決してあきらめない」という強い気持ちを持ち続けたいと思います。あきらめてしまえばそこで終わってしまうと思いますし、気持ちがなければ行動もできないと思います。今回の「国際協力を知ろう」セミナーで出会った JICA 二本松の職員の方、協力隊経験者の方、訓練生の方々はもちろんですが、ともに2日間を仲間にも、同じような興味を持つ者同士として、大変刺激を受けました。このセミナーでできたつながりを大切にしたいと思

います。このような貴重な体験ができる機会を設けてくださり、本当にありがとうございました。

山田 祐理子

奈良女子大学理学部情報科学科 1年

## 1、はじめに

8月2日、3日の二日間、平和構築に関する大学間連携イベントの一環で福島県二本松市に行った。二本松青年海外協力隊訓練所（以下、訓練所）での見学や講義、ディスカッション、グループワークを通して考えたこと、陶芸の杜おおぼり二本松工房（以下、陶芸の杜）での口演会で感じたことを以下に記す。

## 2、ボランティアに対する考え

私は、平和構築や国際協力、震災復興などに関する学習をする中で、1つの疑問を抱いていた。それは、「日本国内での支援活動にまず取り組むべきなのか、それとも国外における支援活動に取り組むべきなのか」というものだ。私自身は海外の文化や言語に興味があり、海外で活躍したいと漠然と考えている。海外で支援活動にも参加したいと考えているが、それは、発展途上国や海外における被災地で困難な状況にある人々を助けたいという思いよりも、自分の海外に対する興味からなのではないだろうか、そのような思いで支援活動に携わってもいいものだろうかと考えている自分がいた。日本国内の問題というのは、当事者として考えなければならない問題であり、どんなに困難でも避けることのできないもの、一方で国外の問題は、第三のこととして考えることができ、取り組みやすいものではないか、と考えていた。しかし、私のこのような思いや考えは、訓練生とのディスカッションや参加者とのグループワーク、学習成果発表会を通して変わった。

訓練生とのディスカッションにおいて、私はボランティアというものに対して抱いていた自分の中での葛藤を話した。返してもらった言葉は、私の頭の中にすっと入った。「自分が何か残せる道ならどちらでもいい。」どちらが正解なのか、選ぼうとしていたことに気付いた。自由に考えて選択し、好きなほうを取り組めばよく、取り組む中で、ある程度力がついてきたときに、さらに道を広げていけばいい。気持ちがすっきりした。訓練生が帰国後に取り組みたいことも、野球選手になる、大学院で勉強しなおす、地元とアジアの架け橋になる、成長する地でビジネスをする、など様々だった。人生は一度きりなので、自分のやりたいと思ったことに全力で取り組み、それが周りを支援することにもつながればいいと感じた。

## 3、国単位でみた協力

個人がどこで支援活動を行うかは、その人が決めればよいと理解した。しかし、国単位で考えると、海外における支援活動と日本における支援活動のバランスが大切になると考える。このことは、2011年3月11日に起きた東日本大震災で痛感した。日本は126の国や地域、国際機関から過去最大規模の支援を受けた。日本はこれまで海外に対して支援する側であったが、今回は支援を受ける側に回った。決して豊かではない国や地域、以前に大規模な自然災害を受けた国からも多くを支援してもらった。例えば、お茶の水女

子大学公開講座で講演された、大阪大学の中村安秀先生（以下、中村先生）が挙げられたものを参照すると、フランスからは放射線測定器を、スリランカからはティーバックを、チュニジアからはツナ缶を、トルコからは温かい言葉を、モンゴルからは国家公務員が1日分の給料の寄付をもらった。その国その国に応じた支援をしてもらった。自国の復興が完全に整ってから他国のことを考える、という考え方ではいけないのだと痛感した。

年間3万人もの自殺者がいること、児童虐待、保育所不足、年金問題、生活保護問題、教育格差など他にも数えきれないほどの問題が山積みであるが、日本が大変だから、他国への支援は後回しにしようという考えではいつまでたっても国際社会に貢献できないことになる。「日本は不景気と言われているが、世界から見たら経済力も技術力もトップレベルであり、国際社会における存在は大きい。震災を経験したからと言って、国内の支援だけに移行することはできない。今まで通り国外での支援も続けなければならない。それだけ、国際社会における責任は大きい。」と訓練所の方がおっしゃっていた。国家間のより良い関係を築くためにも、自国や自社の利益だけを追求するのではなく、共存していくための譲歩が必要であると感じた。今まで日本が行ってきた海外での支援活動の蓄積があつて、多くの国々が今回、日本に支援の手を差し伸べてくれた。海外で活動することが日本に貢献することにもなるのだとわかった。

#### 4、経験の共有

東日本大震災は、高齢化社会を直撃した自然災害だった。被災した多くの市町村では、65歳以上の高齢者人口割合が30%を越していた。世界で起きた今までの自然災害の中でこのような地域を襲ったものはなかった。イベント2日目に訪れた陶芸の杜での口演会で、今回の震災、事故を境に焼き物業を辞める高齢者も多くいるという話を伺った。中村先生の話によると、インド洋津波の被害を受けたインドネシアでは、15歳未満人口が30%を占めていた。そして、各地からの支援を受け、社会の扉が大きく開いてという印象をもつことができたという。ある若い世代の漁師は、津波をきっかけに自分の新しい生き方に挑戦しようと、タクシー運転手に転職したいと希望していたそうだ。これらの対照的な話をふまえ、東日本大震災は今までのものとは状況が違うものだとすることを改めて認識した。陶芸の杜の方は口演中、「悔しい」、「つらい」という言葉を何度も口にされていた。原発事故のために、自分が生まれ育った故郷に生きているうちに帰ることが難しい、今の高齢世代が一番気の毒だという。また、高齢世代に限らず、避難先のコミュニティで暮らすことや商売をすることは容易ではないとおっしゃっていた。今は支援があるからなんとかやっつけているが、それがなくなった時のことを考えると不安だそうだ。悔しくて、悲しくて、切なくて、涙を流しながら暮らしている人々が多くいる。その現状を忘れてはならないと思った。そして、継続的な支援が必要だと感じた。

今回の災害に対する支援に、日本が今までに海外でやってきた支援において経験したこと、他国が経験したことは十分に活かさせていただろうか。例えば、チェルノブイリでの経験は活かさせていただろうか。ロシアの研究者は、事故処理や重大な原発事故の予測な

ど、独自の経験を積んできた。しかし日本は、原発事故が起きてしまったから、その経験を学ぼうとする姿勢が強まったように思う。同じような事故が起きる前に、前例から学ばなければならない。また、震災復興が思うように進まないのは、日本が先進国であるからだと思う。日本が今まで支援してきた国や地域は、社会基盤があまり整っていないところであったので、一から地域の人々とともにつくっていけばよかった。しかし日本の場合、それぞれの町や地域にもともとあった仕組みに合わせながら復興していかなければならない。この調整の部分が、日本がこれまでの支援で経験してきたことと異なるのだと思う。

今回日本が経験したことは次につなげなければならない。日本は高齢化社会なので、高齢世代が多く暮らす地域を襲う災害が再び発生した場合に備えておく必要がある。また、日本に限らず、世界の国々もこの事例に学び、対策を考えておかなければならない。

## 5、最後に

「国際協力ボランティアを知ろう」というテーマで参加した2日間のイベントだった。世界各国でのボランティア経験者や派遣前の訓練生との交流を通して、国際協力ボランティアを「知る」ことができたのはもちろんだが、ディスカッションを通して今まで以上に「考える」ことができたのが何より良かった。青年海外協力隊として派遣されるまでにされてきた、体験や人生における様々な決定について聞くことができ、国際協力というのは様々な道から開かれているとういことがわかった。私は、情報通信技術という切り口から世界と関わっていきたいと思う。自分の興味のあることに一生懸命取り組み、それを将来的には「国際協力」という形にもっていきたい。そして、形のあるものを提供するだけでなく、人々の心の交流といった形の見えない支援も大切にしたいと感じた。

吉田 倫子

奈良女子大学生生活環境学部生活文化学科 1年

### JICA 二本松での講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

#### ■ ボランティア経験者や派遣前の訓練生との交流（1日目）

講義やディスカッションを通してわたしが印象的だと感じたことは、海外協力隊に参加する人の目的や動機は本当に様々であるということです。もちろん、協力隊の本来の活動目的である開発途上国の経済・社会の発展、復興に対する寄与や、友好親善や相互理解といった考え方は共有されていました。その一方で、ディスカッションでお話してくださった方は開発途上国でビジネスをしたいとおっしゃっていました。今まで、ボランティアは無償の助け合いや援助であり、海外協力隊に参加する人々の目的もまた同様である、と思い込んでいたので驚きました。ここでいうビジネスとは現地に限った単純な話ではなく、後々日本の大切なビジネスパートナーになっていき、互いに成長、発展していこうという考えとのことでした。将来を見据え、様々な考えや行動を模索していきながら活動していくことが、今後の海外協力隊には求められているのだと感じました。

また、食堂で夕食をご一緒させていただいた訓練生の方とお話して感じたことは、開発途上国に協力隊として行くということは、自分の人生にも大きな可能性をもたらすということです。その方は“海外に活路を見出す”と表現されていました。協力隊の任期を終えて帰ってきた人の多くが、教えたことより教えられたことの方が大きかったと言うそうですが、それは日本にいただけでは体験することの出来ない世界に行き、新たな価値観を得ることが出来たということだと解釈しました。

わたしがこのイベントに参加する前から気になっていた、任期を終えて帰ってきた人たちはその後どうするのか、という質問にも答えていただきました。教師の方は、県によっては教職の身分を保留してもらえそうです。このような制度を設けると、協力隊に興味はあるが、その後のことを不安に思ってしまうなかなか思い切りがつかない人たちも安心して応募できるのではないかと思います。また、帰国後民間に就職する人の割合は2～3割とのことでした。思っていたより少ないと感じました。しかし、近年急激に帰国ボランティアの評価が見直され、民間企業からの求人数が大幅に増加しているそうです。少しでも多くの方が協力隊に興味を持ち、参加していくことができるように、帰国後手厚いサポートを受けることができるような制度がさらに拡大していく必要があると感じました。

#### ■ グループ・ミーティングと所長さんのお話（2日目）

1日目の講義で聞いた内容をまとめるために事前に定められたグループで話し合いをしていると、ある共通点が浮かび上がってきました。それは国際協力をするにあたって、ボランティア精神と“心技体”は欠かせないということです。

第1に心とは、人とのつながりのことです。現地に行ったら地元民の視点で考え、現地

に同化しなければなりません。日本のノウハウを押し付けるのではなく、価値観の相違を内側から克服し、現地の人々と友好的なつながりを持つことが活動にあたって不可欠であるということを学びました。また、つながりとは現地でのつながりだけにとどまりません。活動のために企業に資金・資材援助を求めることも、他国のボランティアと協力していくこともそうです。

第 2 に技とは、専門性や異文化に適応していく技術、コミュニケーションの手法を指します。訓練所の単元・講座の一日のスケジュールを見せていただいた際に、言語の授業時間や自習時間が多いことが特徴的でした。専門性はもちろんのこと、現地でコミュニケーションをとり、その土地の文化に適応していくためには言語が欠かせないということを改めて認識しました。訓練所では人とすれ違う際に必ず挨拶が交わされており、コミュニケーション能力の高さをぜひ見習いたいと思いました。ときには様々な国の言葉の挨拶が飛び交い、新鮮な気分になりました。また、自分の専門とは異なる知識を訓練生同士で共有し、習得するための勉強会などが開かれていることを聞き、訓練生の自主性が保たれていると感じました。

第 3 に体とは、主に健康を維持するための体力のことを指します。訓練所では規則正しい生活が実践されていました。朝の体操とランニング、また体力テストなどもあるそうです。なかなか運動をする機会の得られなかった社会人から訓練生になった人たちが体力を取り戻せるように工夫されているようでした。また、食堂では日替わりで各国の料理が提供されており、訓練生がバランスの良い食事を摂ることが出来るようになっていました。現地で病気になったら活動にも支障が出てくるでしょうし、万が一病気やけがをしてしまった場合、自分で病院まで行く体力を持っていなければなりません。派遣先では自分の身は自分で守らなければならないということを念頭に置いている分、様々な取り組みが為されていました。

#### 被災者の方の口演会を通じて感じたこと・印象に残ったこと

2 日目、JICA の訓練所を出発した後「陶芸の杜おおぼり 二本松工房」に向かいました。この場所は、震災以前に浪江町で活動していた大堀相馬焼協同組合が原発事故により避難を余儀なくされ、二本松市の協力を得て活動を再開した仮設工房です。大堀相馬焼とは、300 年以上の歴史を持つ伝統的工芸品であり、器全体に地模様にあがる“青ひび”、厳しい寒さの中でも中身が冷めにくくなるように湯呑が外側と内側の二重構造になっている“二重焼”、疾駆する馬の絵を描いた“走り駒”といった 3 つの大きな特徴をもちます。今回、大堀相馬焼の説明とともに震災当時の様子や原発事故の影響、そして協同組合が現在抱える問題などについてお話を伺うことが出来ました。一方で、復興に向けて歩みだしているというお話もしてくださいました。

わたしが感じたことは、震災の爪痕は被災した地域の人々を未だに苦しめており、まだ震災は終わってはいないということです。震災から 2 年以上たった今、多くの人が過去の

出来事と思い始めていると思います。しかし、大堀相馬焼協同組合でも窯元さんの中に原発事故を機に県外へ避難し、窯を触ることのできない環境にいる方がいたり、大堀相馬焼の青ひびを作るのに必要な原料が放射能汚染の影響で採掘することが出来なくなったりと、多くの苦労を経験されていました。原発の影響で立ち入り禁止区域になった故郷にも帰れる見通しがたたないそうです。このような現状がメディアを通じて多くの人に伝われば支援は持続されるのではないかと考えましたが、たくさんのメディアが取材に来て、実際、正しい報道をしてくれるのは一部であるとのことでした。放射能の濃度を測るにしても、本当に濃度の高い水回りなどが避けられることがあると聞いて、日本でもそのようなことがまだ行われているのかと悲しい気持ちになりました。

### 国際協力や被災地支援ボランティアについて考えたこと、今後の抱負

私はもともと異文化に関心がありました。大学の異文化理解の授業で国際ボランティアについて学んだ際に JICA の存在を知り、何らかの形で人の役に立つことが出来る上に現地に直接行って自分の目でその国の文化を確かめられる JICA の活動内容は興味深いと感じました。そのため、今回協力隊の訓練所を見学し、協力隊経験者や訓練生の話を直接聞くことが出来るこのイベントに参加させていただきました。

今回、訓練施設を訪れたことにより漠然としていた青年海外協力隊のイメージをしっかりと焼き付けることが出来ました。経験者や訓練生の方がたの話をきいて、国際協力に対する自分の視野が広がったと感じています。“日本は国際社会において大きな責任を持っているという”という所長さんの言葉から、海外協力隊のもつ意義を改めて考えてみようと思いました。

震災報道に関してわたしは今までメディアの情報を鵜呑みにしてしまっている部分があったので、今回話を聞いていくうちに、現地の声を直接聞くことは本当に大切であると感じました。わたしたちは被災地支援と一概には言っても、地域に住む人々が主体となるような活動をしていかなければならないと思います。国際協力でも言えることですが、支援活動が終了した後も生き続けるという点が大切なことだと考えます。

### 参考資料

#### [大堀相馬焼]

「陶芸の杜おおぼり 二本松工房」を訪れた際に購入した湯呑。下部に開いている穴から覗くと二重焼の構造がよく分かる。青ひびもきれいだが、原発事故後は浪江産の石ではなく、県の研究機関が開発した代替材料が使われている。湯呑の他にも急須や皿、箸置きといったものが並んでいた。



劉茵

お茶の水女子大学文教育学部研究生

8月2日と3日、「国際協力ボランティアを知ろう」に参加し、JICA 二本松青年海外協力隊訓練所に1泊2日の見学をしました。JICA 二本松青年海外協力隊訓練所で派遣者や訓練生の方からいろいろ紹介していただいて、とても勉強になりました。

JICA 二本松青年海外協力隊訓練所は福島県二本松市に位置しています。山の上なので、夏でもすごく涼しいところです。

わたしたちが着いた時、所長とスタッフの方がお迎えに来てくれました。その後、JICA 食堂で栄養のバランスがよくて、とてもおいしい食事を頂きました。

食事が終わったあと、所長から JICA 二本松青年海外協力隊訓練所の建物について紹介してくれました。しかし恥ずかしながら、その後何度も迷子になり、訓練生の方から親切に道を教えていただいたので、ようやくチームのほかのメンバーと無事に集合することができました。

青年海外協力隊の経験者の方の講義がすごく興味深いと思います。一番深く印象に残ったのは、景山さんが言った海外協力経験を通じて、自分が一番得たものは「80年生きていても得られない価値観」というのです。

技術とかは勉強すれば身につけるものですが、価値観の転換だけは、いろいろ経験しないとむずかしいと思います。自分がやっていることは、自分から見ればちゃんとやり甲斐があり、こちらから少しずつ成長できます。そして、前に理解できなかったことが理解でき、前に納得できなかったことが受け入れるようになりました。そういうことを言える景山さんは、きっと海外でいろいろ経験したでしょう。なんかうらやましくなりました。これから私もこのような価値観を得られたらいいなと思います。

JICA 二本松青年海外協力隊訓練所での時間はあっという間に過ぎました。翌日私たちは「おおぼり相馬焼」という陶芸屋に見学し、震災の話を聞きました。

東日本大震災によって発生した大津波は、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に、大きな被害をもたらしました。震災による死者、行方不明者は二万人以上、これは一九九五年に起きた、阪神淡路大震災の倍以上、と日本中、世界中の人々の心にとっても大きな衝撃を与えました。

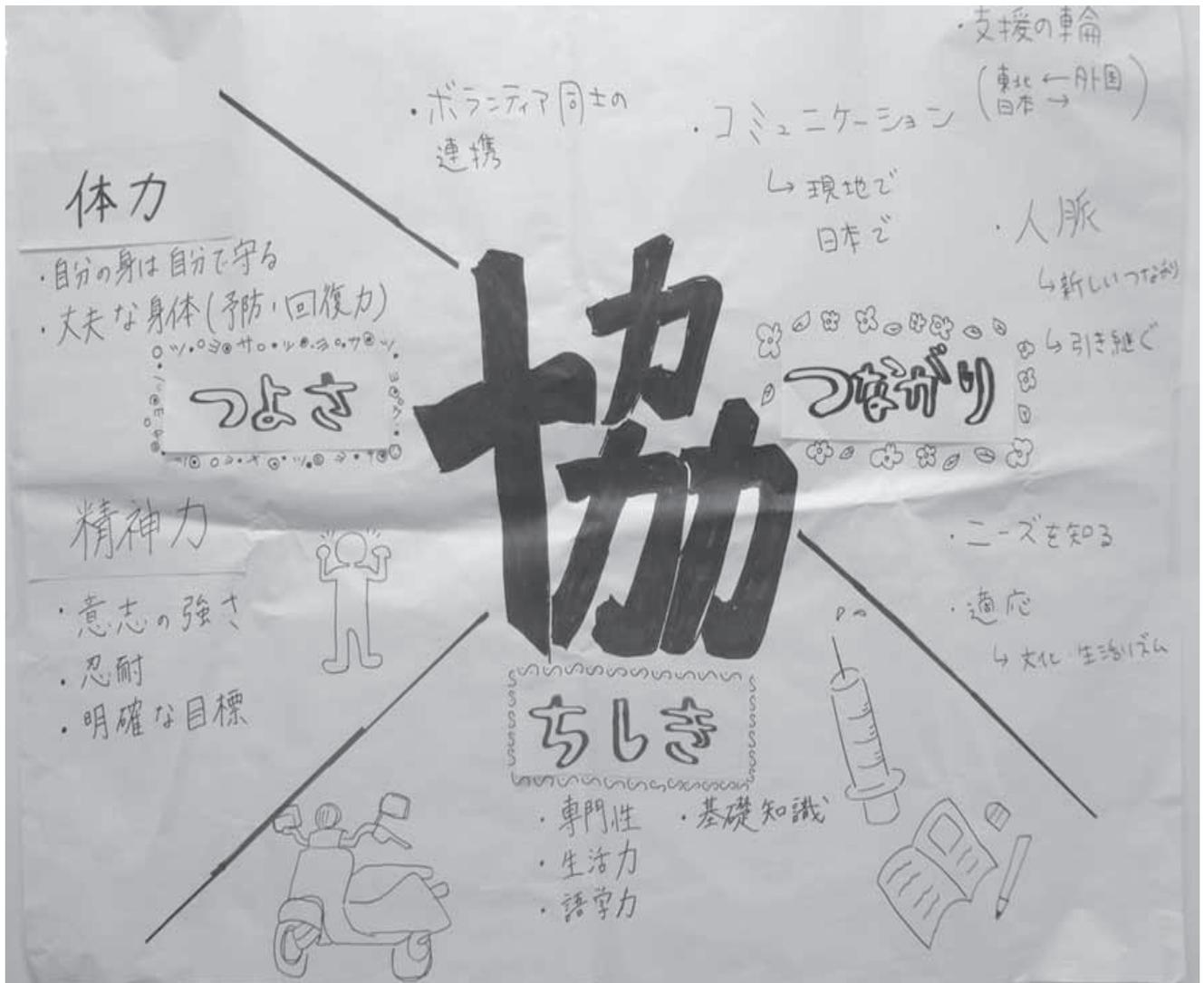
震災前は何でもない日常が当たり前でしたが、それが幸せとは気づかなかったです。地震は確かにたいへんでしょうが、地震起きた後、あらためて普段の生活に幸せを感じました。それは私が震災の話を聞いてからの感想です。

二本松での1泊2日は、とても楽しかったです。たくさんのことを勉強することができ、有意義な時間を過ごしました。もし今後もこのようなチャンスがあれば、ぜひ参加してみたいと思います。



### 3. 学生発表資料





お茶の水女子大学

重松貴子

山下悠

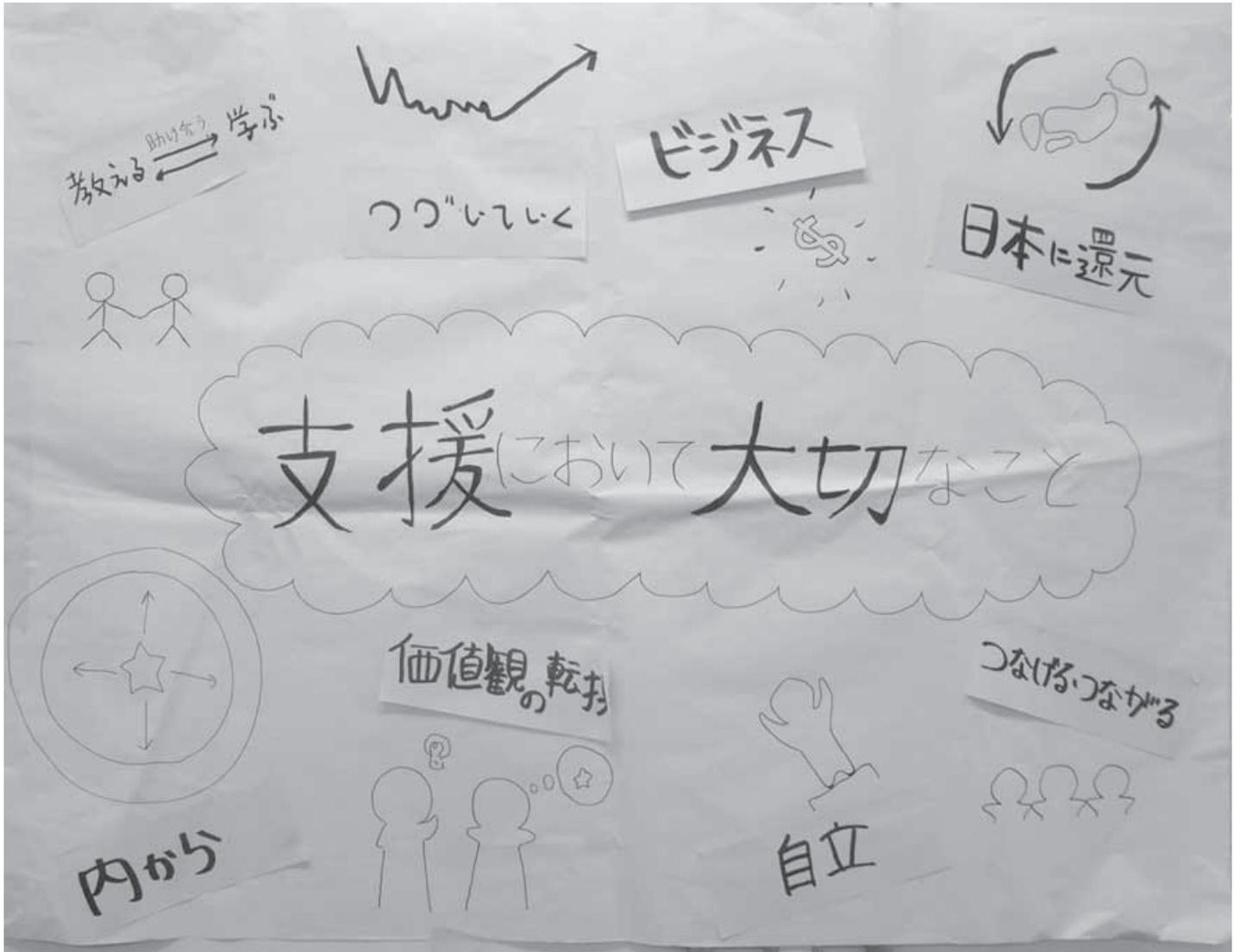
陳偉琦

奈良女子大学

池森菜実

吉田倫子





お茶の水女子大学  
 岡南愛梨  
 劉茵  
 神谷菜穂花

奈良女子大学  
 竹山舞香



# JICAに携わる方々の経験から見たこと

## 派遣前

何かを残そうという  
強い気持ちが必要。

“自分の好きなこと”を  
一生懸命取り組む。

国際協力は様々な道から  
開かれる。

## 派遣中

引き出しは多ければ多いほど◎  
気になることはすぐ実践!

家族(大人)とのつながりの強さ  
→ “誰かのためにやりたい”  
→ 夢も見つけやすい。

もてる人がない人に  
あけて当たり前。

ケニアの人々は技術力高い  
技術者と省庁の連携不足。

地域の中は役人やボランティア団  
体職員、一般市民の連携工作を  
いく。

自分の存在がコミュニケーションのかけ  
橋であるということ。(専門分野あつか  
いはなし。調整役としてもその存在は  
必要とされているのかも知れない。

どうすれば 現地の人  
の力を引き出せるか。

子どもの支援する大人の教育  
も必要。

ボランティア活動も一方的ではなく  
現地の人と一緒に考える。

言いたいことは言葉にしてしっかり  
伝える。

教育の可能性は  
すごい。

## 派遣後

女性が現地へ行き支援する  
ことで、現地の人にも女性でも活躍  
できることを示すことが出来る。

海外支援は日本に  
貢献することにもなる。

新しいものを提供する  
だけでなく、既存のものを  
修理して持続可能に!

自然に従って生きよ。  
by ケニア人

協力隊の活動をどう  
やって日本に還元するか。

日本での復興の経験が  
海外で今後役立つ。

良い悪いなど  
二元論でわけ切れない

お茶の水女子大学  
内山みどり  
水谷真依子

奈良女子大学  
高見明日香  
山田祐理子





## 4. 事前學習報告



公開講座「難民と人道支援 ―東日本大震災の現場で考えたこと―」

平成 25 年 6 月 22 日

2013 年 6 月 22 日（土）に難民や被災者への支援について、大阪大学大学院人間科学研究科教授で NPO 法人 HANDS 代表理事の中村安秀氏を講師としてお招きし、公開講座が開かれました。中村氏はアフガニスタン難民キャンプやインドネシアで活動なされ、東日本大震災後には被災者の支援にも尽力なされています。



(大阪大学大学院人間科学研究科 中村安秀教授)

およそ 2 時間の講義は「難民」の説明と海外の難民キャンプでの支援活動の説明から始まり、その後は東日本大震災の被災者に対する支援の現状を話していただきました。さまざまな現場での支援活動のご経験から、各々の支援体制における評価される点や問題点が具体的に説明され、かなり現実感のある講義になりました。また、異なる場での活動経験が別の現場でより一層活かしたという、経験豊富な先生ならではの体験談を聞かせていただくことができました。

さらに国・専門家や支援者全体が考えるべきこと、支援のありかたについてのご意見は、被災地や難民キャンプのような現地の外部にいる私たちがどのようなことを目標として活動するべきかに直結するものであったため、とても有意義な内容だったと思います。



(質疑応答)

最後に、日本の強み・被災者の方々の未来に向かう姿勢・被災地の子供の可能性について、多数の難しい問題が存在する中で被災者が強く生きていることが伝わるものでした。

講義の後には複数の参加者から多くの質問が活発に時間一杯になされ、参加者が興味をもって積極的に講義を受けていたことが見受けられました。どの質問も支援での問題点や重要な点を的確についたものであり、具体的な議論になっていました。

実際に活動に関わる方からその経験を聞くことによって実際の状況を想像しやすく、参加者が自ら考えることの助けになり、貴重な講義になったと思います。

(理学部生物学科 3年 鈴木 裕香)

## 公開講座「国際協力ボランティアへの道」

平成 25 年 6 月 29 日

2013 年 6 月 29 日（土）に、国際協力ボランティアについて、国連ボランティア計画（UNV）駐在調整官の長瀬慎治さんと、JICA 青年海外協力隊事務局 募集課主任調査役の池上恵美さんを講師としてお招きし、公開講座が開かれました。

長瀬さんからは、国連ボランティアについてご紹介いただきました。イメージビデオも見せていただき、ボランティアが現地の人とどのようにかかわり、貢献活動をしているのか、現地で過ごしている雰囲気を知ることができました。

国連ボランティアは、日本人は比較的少なく、応募資格は 25 歳以上、職務経験が重視されるそうです。このように聞くと、今の私たちには敷居が高いように思えましたが、同時に、それだけ国連ボランティアの即戦力としての活躍が期待されていることが感じられました。

一方で、若者のボランティア活動参加は推進されており、国連ユース・ボランティア・プログラム設立の準備が始められていたり、翻訳や通信教育に関するオンライン・ボランティアなどの形もある、とのことでした。Facebook での広報も積極的にされており、国連ボランティアへの憧れが増すとともに、その存在が身近に感じられるようになりました。



（国連ボランティア計画 長瀬 慎治氏）

池上さんからは、青年海外協力隊についてご紹介いただきました。青年海外協力隊は、日本国籍があれば 20 歳から応募可能であり、参加者の多くにとっては今まさに可能な国際協力ボランティアと言えるでしょう。過去の参加者のデータから、ボランティア帰国後の進路・就職先、参加するまでの経緯とその後についてもお話いただき、ボランティア活動がその後の人生にも活かされることが感じられました。

ボランティアに関心があっても、「自分の専攻って何だろう...」「自分の専門分野・専攻が、直接国際協力に生かせそうにないのだけど、活動できるだろうか」と尋ねる人もいました。そのよ

うな質問に対して、長瀬さん・池上さんは、今は専門が見えていなくても、意欲を持ち続けていれば大丈夫とお話してくださいました。国連ボランティアと青年海外協力隊、両者とも国際協力に関するボランティアですが、両者の特徴・違いなどを知ることができ、国際協力に関心のある受講者は、ぜひ自分たちもやりたい！という想いが高まる講義でした。

お二人とも、これまでの経験者の例やご自身のご経験を踏まえてご講演くださり、自分の人生、キャリアにどのように、国際協力ボランティアを位置づけていくか、ということを考えられるとても有意義な講義でした。時間一杯まで質疑応答は続き、会場の皆さんが、国際協力ボランティアに刺激を受け、意欲・関心をもっている様子がうかがえました。ここで得られた積極的な気持ちを、ぜひ実行に移していきたいと思いました。



(JICA 青年海外協力隊 池上 恵美氏)

(人間発達科学専攻 M2 長屋 裕子)

## 5. 写真





渡辺久美子氏による講義



景山ともこ氏による講義



JICA 二本松での昼食。本日はナシゴレン。



青年海外協力隊員の派遣国から寄せられた、東日本大震災応援メッセージが数多く展示されていた。



理科教育ボランティア研修用模擬実験室の見学  
アジア・アフリカ各国の理科教科書がそろっている。



訓練中の候補生との意見交換



JICA 二本松青年海外協力隊訓練所  
正面玄関にて



大堀相馬焼協同組合半谷理事長による口演



相馬焼の特徴である「青ひび」は大堀地区でのみ  
産出される石を使って作られる釉薬でできるため、  
震災後調合に苦労されたとのこと。



窯元共同の作業場、共同窯の説明をうけた。ガス  
炉 2 基と電気炉 1 基の計 3 基を 21 の窯元が共同  
で使用するには様々な制限があるとのこと。



半谷理事長と大堀相馬焼協同組合の  
正面玄関にて

## 6. 資料



## 二本松青年海外協力隊訓練所（JICA 二本松）

〒964-8558 福島県二本松市永田字長坂 4-2

二本松訓練所は独立行政法人国際協力機構（以下 JICA という）の機関として平成 6 年 12 月に開設されました。

当初の名称は国際協力事業団 青年海外協力隊二本松訓練所で、名称のとおり青年海外協力隊の派遣前訓練実施施設として設立されました。

その後 JICA の組織改編に伴い、現在は、青年海外協力隊事務局の一部門として JICA ボランティアの募集並びに青年海外協力隊員及びシニア海外ボランティアの派遣前訓練を実施する他、開発教育支援や政府開発援助に関する啓発活動（講座、セミナー、イベント等）を主体とした市民参加協力事業を行っています。

二本松青年海外協力隊訓練所での派遣前訓練は平成 7 年 1 月から始まり、主にアジア・アフリカ・中近東諸国に派遣される青年海外協力隊員候補者を受入れてきました。平成 19 年度 3 次隊からは、シニア海外ボランティア候補者との合同訓練となっています。

訓練所では、任地での 2 年間の生活・協力活動を円滑に行うために必要な能力の向上を目的として、70 日間にわたり、規則正しい集団生活をしながら訓練を実施しています。

多岐にわたるプログラムを通して、必要な語学力や異文化適応力だけでなく、自主性や協調性を育て、日本を代表するボランティアとして相応しい人材の育成を目指しています。

「地域に開かれた訓練所」を目指して、訓練プログラムに公開講座・行事や所外活動等、市民の皆さんと交流の機会となるプログラムも取り入れています。

出所：JICA 二本松ホームページ

<http://www.jica.go.jp/nihonmatsu/index.html> （2013 年 9 月 24 日アクセス）

## 陶芸の杜おおぼり二本松工房

〒969-1513 福島県二本松市小沢字原 115-25

大堀相馬焼は、福島県双葉郡浪江町大字大堀一円で生産される焼き物で、今から 350 年前に創業され、昭和 53 年には国指定伝統工芸品に指定されました。素朴な味わいの中にぬくもりと親しみのこもった大堀相馬焼には、「青ひび」、「走り駒」、「二重焼」という 3 つの特徴があります

「陶芸の杜おおぼり」は、350 年になんなんとする伝統を誇る国指定伝統的工芸品大堀相馬焼の展示会館として、平成 14 年 4 月に開館いたしました。大堀相馬焼の熟達した技法を保全し、一層の振興を図るとともに、21 世紀型観光拠点として整備されたものです。

しかし、大堀相馬焼協同組合は、平成 23 年の原発事故により避難を余儀なくされ産地での作陶ができなくなり営業停止になりましたが、平成 24 年に二本松市の協力を得て二本松市小沢工業団地に「陶芸の杜 おおぼり 二本松工房」として再開しました。新たな施設は、展示室・事務室・会議室・陶芸教室・ろくろ場・釉薬かけ物置・仮眠室・窯場などを備えた床面積約 720m<sup>2</sup> の仮設工房です。

ここで再開することにより、伝統的工芸品である「大堀相馬焼」の維持、継承と離散した窯元、浪江町民をつなぐ拠点、ふるさとを想ういこいの場の役割も果たすことを期待して活動しております。

参考資料： 大堀相馬焼協同組合公式ホームページ

<http://www.somayaki.or.jp/index.html> (2013 年 9 月 24 日アクセス)



「国際共生社会論実習」公開講座

# 「難民と人道支援」

—東日本大震災支援の現場で考えたこと—



**日時：6月22日(土) 13:30～15:00**

**場所：大学本館 125室**

※「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」を受講していない方も聴講可能です。お気軽にご参加ください。

**講師：中村 安秀(大阪大学教授)**



特定非営利活動法人HANDS代表理事。1977年東京大学医学部卒業。86年から国際協力機構（JICA）の母子保健専門家としてインドネシアに赴任、その後も途上国の保健医療活動に取り組む。1999年10月より現職。2000年NPO法人HANDS設立に携わり代表理事に就任。国際協力、保健医療、ボランティアをキーワードに、学際的な視点から市民社会に役立つ研究や教育に携わる。1998年第1回母子手帳国際シンポジウムを日本で開催して以降、隔年で世界各地にて同会議を開催している。

対象：本学附属高校生、学部生、大学院生

予約：不要、当日教室まで直接お越し下さい

お問い合わせ：お茶の水女子大学 グローバル協力センター

Tel：03-5978-5546

E-mail：info-cwed@cc.ocha.ac.jp

# 国際共生社会論実習 第2回公開講座 「国際協力ボランティアへの道」

日時:6月29日(土) 13:00~15:00

場所:大学本館 125室

「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」を受講していない方も聴講可能です。お気軽にご参加ください。

## 講師:長瀬 慎治

国連ボランティア計画(UNV)連絡調整官

愛知県出身。米国オハイオ大学大学院で政治学修士号を取得。その後帰国して大学の事務職員として勤務後、2001年4月にUNVとして国連東ティモール暫定行政機構(UNTAET)に参加。2002年には同じくUNVプログラムオフィサーとしてUNDPサモア事務所に勤務した。2005年7月より「ほっとけない 世界のまずしさ」キャンペーン事務局にて勤務、2007年4月より現職。



## 講師:池上 恵美

JICA青年海外協力隊事務局 募集課主任調査役

1995年お茶の水女子大学を卒業後、同年JICA入職。青年海外協力隊事務局、企画部、アジア第一部に勤務。2000年配偶者(JICA職員)の海外勤務発令に伴い、JICA退職。コロンビアに家族として同伴。帰国後、2003~2004年、2006~2007年臨時再雇用職員として青年海外協力隊事務局に勤務。2007年正規職員として復職。国際協力人材部に勤務。育児休業取得後2013年2月から現職。青年海外協力隊員の募集・選考に携わる。



対象: 本学学生、本学附属高校生、教職員ほかお茶大関係者

予約: 不要、当日教室まで直接お越し下さい

お問い合わせ: お茶の水女子大学 グローバル協力センター

Tel: 03-5978-5546

E-mail: [info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)

平成25年度お茶の水女子大学グローバル協力センター  
大学間連携イベント

6/21(金)  
申込〆切

# 「国際協力ボランティアを知ろう」

日時:8月2日(金)～8月3日(土)※2日間の参加必須  
場所:JICA 二本松青年海外協力隊訓練所

〒964-8558 福島県二本松市永田字長坂4-2

## 【趣旨】

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、平和構築に関する大学間連携イベントの一環として国際協力機構(JICA)二本松青年海外協力隊訓練所の協力を得て、アジアやアフリカ諸国でのボランティア経験者や派遣前の訓練生との交流を通じ、国際協力ボランティアの役割や、草の根国際協力のありかたを考えます。最終日には、東日本大震災被災者の方の被災、避難、復興に関する講演を聞き、私たちに何が出来るのか考える機会とする予定です。



写真提供:東海林美紀/JICA

### プログラム(予定)

#### 1日目 東京発

二本松国際協力プラザ展示見学  
青年海外協力隊の制度や実績に関する講義  
海外ボランティア経験者の講義とディスカッション  
派遣前の訓練生との意見交換

#### 2日目 グループ・ミーティング

東日本大震災被災者の方の被災、避難、復興に関する講演会  
東京着



写真提供:久野武志/JICA



写真提供:飯塚明夫/JICA



お茶の水女子大学  
Ochanomizu University

対象:本学学生 約20名、他大学学生 約10名  
参加費:食費・JICA二本松での宿泊費(実費自己負担頂きます)  
お問い合わせ:お茶の水女子大学 グローバル協力センター  
Tel:03-5978-5546

申込み方法:グローバル協力センターHPより参加申込書をダウンロード上、詳細を記入して以下のアドレスまで送付ください。  
E-mail:[info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)

参加申込書は協力センターでも配布しています!



---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」  
実施報告書

平成 25 年 10 月  
お茶の水女子大学 グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1  
Tel/Fax: 03-5978-5546  
Email: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

